

函館とアイヌ資料コレクション

9月8日(金) 19:00~20:30 東京会場
9月12日(火) 18:30~20:00 札幌会場

講師 長谷部 一弘 市立函館博物館館長

皆さん、こんばんは。市立函館博物館の長谷部です。

私は、これまでアイヌ文化の中でもどちらかといえずと生活用具などに関する物質文化を専門分野として調査・研究をしてまいりました。これからもういう立場で研究をしていくのではないかと考えております。函館には伝統的なアイヌ民族の物質文化を物語る資料がたくさんありますので、今日は改めて函館にあるアイヌ資料のコレクションを紹介したいと思います。最初に「函館博物館旧蔵資料について」、次に「馬場コレクションについて」、最後に「児玉コレクションについて」お話をしていきたいと思ひます。

まず、本題に入ります前にこれらのアイヌ資料を収蔵、展示しております函館市北方民族資料館について紹介したいと思います。ご存じのとおり、この資料館は平成元年からアイヌ関係の資料を中心に北方民族資料を展示、公開しております。この資料館の建物は日本銀行函館支店として大正15年から昭和63年まで営業していましたが、日本銀行函館支店の移転により装いも新たに、平成元年函館市北方民族資料・石川啄木資料館として建物の1階と2階に分かれて開館しました。もともと銀行としての建物で使用目的が違っておりましたので、間仕切り一つにしても博物館仕様とは違っていて難儀しながら企画、展示をしました。平成5年には石川啄木資料館が新しくできた文学館に移ったため、全館を北方民族資料館としてリニューアルオープンしました。これまで年間およそ3万人から4万人の方々にご来場いただき、現在に至っております。

市立函館博物館にはアイヌ資料がたくさん収蔵しているということは学術研究者の間では知られてはいたのですが、私は昭和55年に博物館に勤務することになって、前任の民族担当の学芸員が退職されたこともあり、その意味では収蔵しているアイヌ資料を1から整理することとなり、そこでこれからお話しするコレクションに出会ったわけです。

そのうちの1つが、いわゆる開拓使が建てた日本で一番古い博物館の1つである開拓使函館支庁仮博物館が収蔵していたアイヌ資料です。それから、函館出身の馬場脩先生が収集した「アイヌの生活用具コレクション」として昭和34年に重要民俗文化財に指定されたアイヌ資料で、今は有形がついて重要有形民俗文化財となっています。この資料は昭和46年に馬場脩より函館市に譲渡され、「アイヌの生活用具コレクション」というより「馬場コレクション」としてよく知られております。次に、こ

ちらも函館出身の方で北海道大学の名誉教授であった児玉作左衛門先生が昭和4年頃から約40年かけて収集した資料で、昭和55年に函館市に寄託され「児玉コレクション」と言われている資料であります。この3つのアイヌ資料コレクションで函館にはすごいアイヌ資料があると言わしめているわけです。改めて考えてみますと、このことにより日本で一番古いアイヌ資料から現代に至るアイヌ資料まで一通り見るができる、知ることができるのが函館に残されたアイヌ資料のコレクションだと結論づけられると思ひます。これらの資料は、後ほどお話ししますが、バラエティに富んで、各地域の特色が見られる実際に使用していたオリジナルな生活用具から、どのような生活をしていたのか、どのような技術を持っていたのかということなどを知ることができるわけです。

まず日本で最も古いアイヌ民族資料のひとつである函館博物館旧蔵資料についてお話をいたします。現在の函館博物館の前身となる開拓使函館支所仮博物館は明治12年に開場しています。これは、明治4年に開拓使顧問でアメリカ人のホーレス・ケブロンが、北海道の開拓、殖産振興を図るために大学、図書館、そして博物館の必要性を建言し、その建言を受けて開場したわけです。日本で一番古い博物館は明治5年に開館した現在の東京国立博物館ですが、地方の博物館ということでは、明治10年に札幌の偕楽園にできた開拓使仮博物館が最初で、函館の博物館は2番目ということになります。



【 開拓使函館支庁仮博物館 】

画像で紹介しますが、これは明治12年、開場当時の函館仮博物館です。後ろは函館山で、はげ山になっております。杉の木が写っていますけれど、これはもともとあ

ったものではなく幕末に植林されたものです。手前の石の橋は白川橋と言う北海道で一番古い石の橋で今でも残っております。現在、この建物は北海道の有形文化財に指定されており、時々博物館の講座などで使用していますが、それ以外の時は中を見ることはできません。また周囲の木々が大きくなったので、今はこの角度から建物を見ることはできません。

また明治 12 年開場当時の函館新聞広告欄に、北濱社から博物場の陳列目録が発行されたことが掲載されており、西洋紙 1 枚の裏表に略目録として陳列場に展示された資料のリストが 1 銭で販売されました。私どもの博物館で最初にどんなものがあったのか知る手がかりとなるもので、非常に貴重なものなのですが現在のところ残念ながら発見されておりません。私もぜひ発見したいと思っていますので、何か良い情報があれば教えていただきたいと思っております。

明治 14 年開拓使の廃止により、東京の芝にあった開拓使仮博物館が廃止されます。これに伴って北方関係の資料が函館で保管されることになり、函館博物館に移管されています。明治 17 年には第二博物場が開場しています。この建物は現存しているのですが、街の歴史や建物の歴史などいずれも紆余曲折を経ているのと同じように、この博物場の場合も、明治 24 年に庁立函館商業学校の商品陳列場になり、明治 25 年には第一博物場も商品陳列場となり、博物館という役割から庁立函館商業学校の附属施設として移管されています。この辺から日本で一番古いアイヌ資料は庁立の学校所有ということで教材として使われるようになりました。博物場から庁立函館商業学校へいろいろ引き継がれたわけですが、その時、引き継ぎの物品一覧が作られており、現在その原本が函館市中央図書館に保管されています。それを見ますとエトピリカで作った千島アイヌの衣服など、結構貴重な資料が多く掲載されておりまして。

明治 28 年には函館商業学校が廃止され、それに伴って博物場は庁立函館尋常中学校、現在の北海道函館中部高等学校に引き継がれました。以来、そのまま函館中部高等学校の教材という形で使われていたようです。そのアイヌ資料が昭和 31 年に函館中部高等学校から函館博物館に寄託され、アイヌ資料は巡り巡って市立函館博物館に戻ってくるということになったのです。この資料をメインに私たちは市立函館博物館の旧蔵資料と呼んで扱っております。当然、この旧蔵資料は日本で一番古いということで、東京国立博物館、それから札幌仮博物場、現在の北海道大学植物園内にある博物館の資料と同等の資料であるということによって皆さんに知られていますので、少なくとも市立函館博物館には幕末から明治期にかけての原資料があるということを知っていただければ幸いです。

これらの資料は、昭和 54 年に発行の『市立函館博物館蔵品目録 民族資料篇』に載せられていますが、現在の

博物館に入る前の資料にはいろいろな歴史があったようです。函館博物館自体、開拓使の博物場にはじまり、途中、庁立函館商業学校の商品陳列場の時代を経て昭和 23 年に市立函館博物館となるのですが、その間、戦前から戦中にかけては図書館に間借りするような形で旧博物場 1 号館、2 号館を開館していたということや戦中、北の図書館人と言われ北方関係資料をたくさん収集した函館図書館の岡田健蔵館長と懇意になった田島史郎さんという方が博物館の資料調査蒐集委員という形で委嘱され、満州で資料を収集して博物館に収めたということもありました。博物館に係る記録を見る限り、委嘱の形で資料収集の役割を担った人はこの人物しかいないのですが、そういうことがあったという事実で改めて驚いています。また岡田健蔵さんは、図書、いわゆる文物といった資料だけではなく、ものが一緒にあって初めて青少年の育成のために役立つのだということで、図書を集めるとともに郷土資料などのものも収集したわけですが、そしてその両方を見せ、知ってもらうための機能をもった施設こそが彼の理想の施設だったのです。そういうわけで、現在の函館図書館には北方関係を中心とした郷土資料を閲覧できる郷土資料室があるのです。

次に、これは昭和 31 年に函館中部高校から市立函館博物館にアイヌ民族資料が寄託された時の新聞記事です。千島アイヌのバラライキと呼ばれる三弦の楽器やキセルが写っています。これらは日本で一番古いアイヌ資料の部類に属し、現在、函館市北方民族資料館で展示しております。今でも寄託資料のままとなっており、元来函館博物館のものなのだから寄贈してもらいたいと思うのですが、学校の宝、校宝だということで譲ってもらうことは難しいようです。

函館の博物館は日本の中で 1 番古いということもあり、開拓使という大きな行政組織が集めたアイヌ関係の資料のほかにはイテリメン、アリユートという北方域の民族の資料など、他では見ることができない北方民族資料も数多く収蔵しております。開拓使によるおおかたのアイヌ資料は北海道や千島で収集されましたが、明治期の資料収集は開拓使だけではなく地元の篤志家によっても資料が集められております。例えば国立第百十三銀行の頭取を務めた三代目杉浦嘉七という方がおりますが、この方は十勝、幌泉場所で漁場を請け負ったアイヌの人たちとも親交があって、アイヌ民族に山丹交易でもたらされ珍重された絹織物の山丹服を手に入れたようで、この山丹服を明治 12 年に函館博物館の開館記念のために寄贈しております。また、明治 17 年にはキリスト教布教のために函館に在住していたジョン・パチャーが仕掛け弓のアマツボを寄贈しております。函館博物館に何かを寄贈したということではないのですが、明治 36 年にはロシアからプロニスワ・ピウスツキが来道し白老地方のアイヌ資料を調査しております。そして調査されたアイヌ資料は収集しサンクト・ペテルブルグ等に持ち帰っております。

その際ピウスツキが博物館を訪れたという記録はありませんが函館に来て調査をしたことは記録にありますので、たぶん博物館も訪問したのではないかと思います。後ほど馬場コレクションについてお話をしますが、ピウスツキが樺太で資料を収集した後に、函館出身の馬場脩先生が樺太で資料を収集しておりますので、どこか因縁めいたものもあるのかなと思っております。また函館博物館には幸田露伴も足をとめており、アリュート民族の3人乗りの皮舟を見て感激したということを漢詩におさめております。このことを当初私は全く知らなかったのですが、ある日東京の方から「幸田露伴がお宅の博物館で3人乗りの皮舟を見て感激したと漢詩に書いているが、その皮舟が何の材料で出来ているか知りたい」という手紙をいただき、図書館で幸田露伴の本を調べてみると確かに書かれておりました。明治20年頃に詠んだ詩のようです。

ここで函館博物館の旧蔵資料の特性についてお話をします。まず、先ほどからお話しておりますように、現存する国内最古のアイヌ資料ということで、東京国立博物館や北海道大学の資料と同等のオリジナルなアイヌ資料で、断片的であっても当時の生活の様子を知ることが出来るということ、函館図書館にある『蝦夷島奇観』などの記録との比較ができるということ、つまり江戸時代のもの、幕末から明治期にかけての資料で、どこが同じでどこが違うのかということも検討、同定できるわけです。次に博物館史の視点では、北海道や千島で集められたアイヌ資料は、民族分野の生活用具では日本博物史の第一級の資料といえ、アイヌ民族の文化を知るという意味でもやはり一級資料であります。では、旧蔵資料をどのように観るか、どのように捉えるかという視点についてお話しします。

一つは、函館博物館の歴史そのものを観ることになるということです。現在の函館博物館の本館は昭和41年に開館した割には老朽化が激しく、いつ崩れるのかという危機感を持っているのですが、それは別として、アイヌ資料が旧函館博物館1号館、2号館をかきわきりに、平成元年に函館市北方民族資料館を開館し新たに収蔵、展示したという函館博物館所蔵のアイヌ資料の辿ってきた経緯を踏まえて観ていただければよいのではないかと思います。また、北海道の北海道開拓記念館などアイヌ資料を収蔵、展示している博物館の歴史の中で、どのように位置づけられ、どのように活用されてきたかということも確認しながら観ていただければと思います。当館所蔵のオリジナルな北海道や千島地方のアイヌ資料を見ますと、資料一つ一つにラベルが貼ってあり、どこでいつ集められた資料なのか分かるように記載されております。これはあたりまえにアイヌ資料を扱っていただいた先輩たちの資料を観る確かな目があったといえますが、先達諸氏が未来永劫に残さなければならぬとの考えに感謝したいと思います。このラベルを一度剥がして新し

いものに変えてしまうと、そこでアイヌ資料の価値と歴史が途絶えてしまいますので、これからもこのままで残していきたいと思います。次に、オリジナルな伝統的製作技法を見るということです。これは当然ながら、どのような技術、技法で作られているか、素材はどのようなものを選んで作られていたかを知ること一つ一つの大きな視点だと思えます。たとえば、縫合の際の縫い糸が現在は木綿の糸に変わってしまっているものでも、当館所蔵のルウンベ、色裂置文衣を観察すると本来イラクサの繊維を糸にして、それで衣服を縫い合わせていたということを知ることができるわけです。それから、函館コレクションの一つを観るとということです。これは他の函館を象徴、代表するコレクションにも言えることなのですが、函館が有する多くの文化的要素の中でメインとなり得る文化的な函館コレクションの一つ、「アイヌ資料を中心とする北方民族の生活用具コレクション」が函館市北方民族資料館に行けば観ることができるということで、観光の資源として生かすという観点からも非常に大切なことではないかと思います。

次に、馬場コレクションについてお話ししたいと思います。馬場コレクションの所有者であった馬場脩先生は、明治25年函館で生まれ、函館中学校、現在の北海道函館中部高等学校を卒業しております。ですから、馬場先生は在学当時函館中学校で函館博物館旧蔵アイヌ資料を実見し触れていたはずで、そして血気盛んな馬場少年は岡田健蔵さんと組して函館考古会や博物学会を設立し、函館の町中いたるところで遺跡発掘に明け暮れるなど大好きな若者が集まって、活発に活動していたようです。馬場先生は様々な資料を収集しておりますが、特に函館考古会を設立したほどでしたから、遺跡発掘にはまってしまい、学生の頃から考古学の世界に興味を注がれ、考古学と先住民族や北方民族との関連がアイヌ資料を収集するきっかけになったのではないかと思います。

大正期に入ると馬場先生は考古学者では儲からないからかどうか分かりませんが歯科医師になっております。馬場先生のお父さんは函館で弁護士をしておりました馬場民則という方で、いわゆる函館の名士でしたから、馬場先生としても、歯科医師になって一旗上げ、考古学の方は趣味としてやっていこうと考えたのではないかと思います。東京の本郷で開業したわけですが、歯医者結局開店休業というような状態で、昭和5年から昭和16年にかけて、千島、樺太、北海道で調査を行い、考古や民族資料の収集をしております。やはり自分の志す道は考古学と民族学だと決心していたのではないのでしょうか。馬場先生は、日本民族学協会の第1回、第2回の調査団に加わり、岡正雄先生が調査団長で根室の北構保男さんも参加しており、当時北方学術研究の第一線で活躍したいろいろな方が関わって北方域の調査研究をしていたことが分かります。

馬場先生は、実際に千島、樺太、北海道の各地域に調

査に行って資料を収集したことや若かりし頃の考古学に対する情熱、思いを『北方民族の旅』にまとめ、昭和51年に吉川英治文化賞を受賞しております。この本は昭和40年代に毎日新聞に連載されたものをまとめたもので、馬場先生がなぜこういう道に入ったか、どのようにして資料を収集したかというエピソード等が紹介されております。

馬場先生が収集されたアイヌ資料は、昭和34年に重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」に指定されております。当初758点だったのですが、8点が虫食いで滅失してしまい結局750点になったのです。また、アイヌ資料のほかの北海道や千島、樺太などで発掘された考古資料1,110点は、函館市に寄贈され、調査の成果は『樺太・千島考古・民族誌』にまとめられております。実は、馬場先生が収集したアイヌ資料が750点だけだったかという、それ以上あったようです。昭和20年に東京大空襲があり、東京本郷の自宅も被害に遭い、その時多くのアイヌ資料を焼失してしまったということです。偶然焼失を免れたのがこの数なのです。当時の民族資料では、杉山寿栄男さんの資料も同じような境遇に遭っているようです。もともと馬場先生の収集したアイヌ資料は750点の倍以上はあったのではないかとされており、残念ながら過去に収集した資料のリストは無いので正確なところは分かりません。

馬場先生は、昭和22年に東京神田ニコライ学院で英語の教師になっておられますが、馬場先生自身もロシア正教の敬虔な信者であるということもあって奉職されたようです。現在、函館のハリストス正教会の司祭に馬場さんという方がいらっしゃるの、馬場先生と親戚関係にあるのか聞いたところ縁もゆかりもないとのことでしたが、実は馬場司祭は馬場先生が晩年ニコライ学院で教鞭をとっていた時の学生で、実際に授業を受けたことがあるとのことでした。その頃の話をお聞きすると、「当時いろいろな先生がいたけれど、あの先生は面白かった。途中で授業にならないことがよくあり、話が脱線して英語の授業なのに考古学の話や民族学の話になってしまうことがよくあった」というのです。

馬場先生は歯科医師の方は開店休業という状態だったのですが、収集したアイヌ資料をこつこつ研究して論文を発表しています。昭和24年にはイギリス王立人類学研究所の月刊誌「MAN」に論文を発表し巻頭を飾っています。この「MAN」に掲載されたということには若干わけがあったようです。当時イギリスは貴重なアイヌ資料を自分の国のコレクションとして持ちたいということで、馬場先生に何度かモーションをいにかけていたのです。今でもそうですけれど海外に流出して一度相手の国に渡ればもう二度と戻って来ないわけですから、これは非常に危惧された部分であったわけです。そういったこともあり文化庁は昭和34年に「アイヌの生活用具コレクション」を重要民俗文化財に指定し、指定することで国のお

宝、つまり国民の共有財産にしたという経緯があったようです。

昭和44年、市立函館博物館では本館ができて3年目に「北方民族展」を企画し、アイヌ関係だけではなく、アリュートとかイテリメンといった他の北方民族も含めて展覧会を開催しています。この時まで馬場先生の収集したものはほとんど世に知られることなく、研究者の間でのみ知られているものだったのですが、750点の内40点の本邦初公開ということで展示、公開されました。それまで本当に大切に我が子を育てるかのようにアイヌ資料を慈しんでいたのだらうと推測しますが、ここで初めて馬場コレクションが世に知られたということになります。その2年後には樺太アイヌに限定した「樺太アイヌ展」を開催しています。これは「重要民俗文化財、馬場脩アイヌコレクション展」ということで、当時「市政函館」という市民向けの広報紙などで大々的に宣伝されました。馬場先生は東京に居を構えていても函館出身ですから、このような展覧会が行われる時や季節のいい夏には毎年函館を訪れていたようです。今では函館公園の下に市営の谷地頭温泉しかないのですが、当時函館博物館の下に勝田旅館という旅館があって、馬場先生はそこを定宿にしていたようです。そして馬場先生は昭和54年に享年87歳で亡くなられ、函館のハリストス教会で厳かに葬儀が執りおこなわれ、函館市営の共同墓地に埋葬されました。私も晩年、馬場先生とお会いしておりますが、終生独身で非常におしゃれでダンディな方でした。

ここで馬場先生の足跡を画像でいくつか辿ってみたいと思います。これは馬場先生を博物館に講師としてお招きし、市民講座が開かれた時の写真です。考古学の話をしているのではないかと思います。函館には、この春に函館市の文化財に指定された「ブラキストンの大型磨製石斧」があり、ブラキストンラインで有名なトーマス・ライト・ブラキストンが函館で収集したもので40センチ位の大きさで日本では2番目に大きい磨製石斧で、46、7センチ位の秋田県で発掘されたものに次ぐものです。馬場先生は、この磨製石斧についてのエピソードやブラキストンの偉業を説明しているようです。昭和46年に考古資料も含めて函館に「アイヌの生活用具コレクション」が譲渡されることになりましたが、この時、北海道開拓記念館とどちらが譲り受けるかということで競りあいになったようです。北海道も北海道の宝として開拓記念館に入れたいということだったのですが、結果的に函館にゆかりがあるということで函館市が当時、国の指定を受けている「アイヌの生活用具コレクション」を有償で譲り受ける事になり、ここにアイヌ資料の一大コレクションが函館市の貴重な財産となったわけです。函館市の財産になった後も、馬場先生はお元気で、博物館の民族担当学芸員と一緒に一つ一つ資料の整理、調査を行い、『カラフトアイヌのヒゲベラ』、『北海道アイヌのひげべら』、『アイヌの喫煙用具』、『アイヌの服飾品』、『アイヌの狩

獵用具・その他』という5分冊の目録を完成させました。目録には資料1点1点に番号を付け全部写真付きで載せられ、収集されたアイヌ資料には全て収集地が記されています。

馬場コレクションの特性についてお話をしますと、まずアイヌの生活用具コレクション750点の中で、国内では数少ない樺太アイヌ資料、千島アイヌ資料が含まれています。特に樺太アイヌの信仰用具の資料が多く、750点のうち300点以上が髭篋と言われているイクパスイ、イクシニで、非常に精巧につくられているものがメインになっております。資料を収集した時の由来について、『北方民族の旅』に書かれている内容もそうなのですが、なかなか自分の歩んできたことを記録に残しているコレクターは少ないのです。どちらかというと一緒にあの世に持っていくというパターンが多いようです。馬場先生は自分の業績も含めてアイヌ資料を収集した証として貴重な記録を残されています。そのおかげで今、冠たる馬場コレクションについて、ものの内容だけではなく、そういった資料の収集や調査・研究に関わる経緯、由来等についても広く周知されていることはすごいことだと思います。また、馬場先生の収集された考古資料は、北の考古学と民族学の狭間を解明する貴重な資料となっております。特に内耳土器がいわゆる鉄なべに替わっていくというところに着目して関連のある資料全てを、本州の豆を炒る時に使う焙烙に至るまで収集しており、それらの資料も現在函館博物館に収蔵しております。言うまでもなく馬場先生は北の考古学と民族学の権威なのですが、先生には師と仰ぐ考古学、民族学の指導教官を1人として持たなかったのです。在野の研究者という言い方をされながらも、自分1人でこれだけの資料をこつこつと収集しながら、調査・研究に没頭しそれをいろいろな形で学界に紹介し、ひいては故郷函館のために尽力された偉大な研究者とっております。

馬場コレクションについての視点は、北海道、樺太、千島地域の文化形態の違いを見ることができるといふこと、各地域の伝統的な形態そのものから製作技法等テクニクの要素を見ることができるといふこと、そして、やはり馬場コレクションも函館コレクションの一群をなす一大コレクションであるといふことです。

さて児玉コレクションにつきましては、皆さんもいろいろな機会を通じてよくご存知かと思えます。「馬場・児玉コレクションにみる北の民アイヌの世界」という展覧会を2000年に財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が開催し、これまでお話しした馬場先生の資料と合わせて児玉コレクションを紹介しております。決して自分が執筆したところが多いからというわけではないのですが、展覧会の図録も大変よく出来ております。

児玉作左衛門先生は、現在の秋田県鹿角市に誕生しましたが、幼少の時にお父さんの善吉さんが函館で眼科医を開業することになったため秋田から引っ越して来まし

た。それから児玉先生は函館中学校を卒業しておりますので、馬場先生の後輩にあたることとなります。函館中学校の後、東北帝国大学、現在の東北大学に進学します。児玉先生はもともと解剖学を志して脳の研究をしていたのですが、その中で北方民族の形質学的な研究に携わることになり、そこで縄文人やアイヌ民族は研究の対象から外せないということで、考古学と民族学に関わっていくようになるわけです。そして、昭和10年代の北千島調査団に参加し、昭和15年にはオホーツク文化で有名なモヨロ貝塚を調査しております。昭和25年には、函館市の住吉町遺跡でも発掘調査を行っております。この当時の遺跡の発掘は狸掘りに近い大胆な方法が普通で、その善し悪しは別として多くの考古資料が掘り出され、この時発見された考古資料の一部は児玉コレクションに含まれております。この発掘調査は、函館博物館も共同調査に加わっておりましたので発見された考古資料はそれぞれに分かれてあったのですが、昭和55年に児玉コレクションが博物館に寄託されようやく一緒になれたわけです。昭和49年に児玉コレクションを紹介した『銀花』という本が出版されております。このような出版物で一般大衆に紹介されたのは、これが最初ではないかと思われます。実は私がアイヌの民具、そして児玉コレクションに出会ったのがこの一冊の本なのです。その時、児玉コレクションの衣服や木器などを見て何て綺麗なのだろうと思いました。

これは私たちが札幌の児玉家を訪問した時に撮影した写真ですが、非常にたくさんの資料が収蔵庫にあって、まさに宝の山でした。これらの資料は第2次世界大戦前後を挟んで、児玉先生が私財を投じて約40年かけて収集したもので昭和55年に函館博物館に寄託されました。この時、寄託された資料は先史・考古資料が7,157点、アイヌ民族資料が2,786点です。その後1,646点のアイヌ関係の資料が追加で寄託されており、まだ整理中のものもありますが、函館博物館のアイヌ関係の資料は1万点を越えているのではないかと思われます。このような児玉コレクションを整理しまとめた目録があります。これは読物としては一見おもしろくも何ともないものですが、目録の作成により資料が分類整理され、リストアップされることによって資料の収蔵と取り出し、そして展示などの活用がスムーズにでき、コレクションの調査・研究のために全体像を把握することが容易になるわけです。このような目録を作成するためには、当然整理作業が必要になります。整理作業は、一つ一つの資料を計測し、撮影をするなど資料カードといういわゆるお医者さんがカルテを作成するようにその資料に関するデータを全部記録していきます。この作業の際に、土器などの欠けている部分は石膏をつめるなどして修復していきます。それをまとめたものが蔵品目録、「児玉コレクション目録」となるわけです。

こうして考古資料とアイヌ資料からなる児玉コレクシ

ヨンの整理作業を行い、無事『児玉コレクション目録 先史・考古資料編』、『児玉コレクション目録 アイヌ民族資料編』を発行することができたのですが、函館市北方民族資料館ができるまで、整理された児玉コレクションはどこで展示、公開されるのかとマスコミなどで注目を浴びていました。その後日本銀行函館支店を再活用して函館市北方民族資料館の開館に向けて準備を進め、平成元年に石川啄木資料館を併設して北方民族資料館をオープンさせ、児玉コレクションは、博物館旧蔵資料、馬場コレクションとともに晴れて展示、公開されたわけです。平成5年には北方民族資料館が独立館となり、展示、公開の充実が図られ現在に至っております。また児玉コレクションは、北方民族資料館での展示、公開だけでなく、他の関連博物館、関係機関の企画展覧会などへの出品協力や北方民族資料館での市民を対象とした児玉コレクションについての講演会等を開催、紹介するなど、様々な形で幅広く活用しております。皆さんに配付しましたレジュメに「児玉コレクション、故郷函館へ」と書いておりますように、昭和55年より寄託資料として函館博物館が預かっておりました児玉コレクションは平成10年に長女の児玉マリさんから寄贈を受けることになり、児玉先生ゆかりの函館市にとっても大変意義深いことだと思っております。

児玉コレクションの特性の一つとして知っておいていただきたいことは、児玉コレクションのとりわけアイヌ資料のバックデータが乏しいということです。本当に児玉コレクションにはバックデータが少ないのです。実はそのことが何を意味するかを知っていただきたいわけです。児玉先生のアイヌ資料の収集は、アイヌ資料の海外流出がどんどん進んでいた状況下で、まずものだけ集めよう、集めれば後で何とかなるということで収集されたものなのです。確か『北海道の文化』に「緊急を要したアイヌ研究」という題で、児玉先生が回想されております。そのような状況下にあったアイヌ資料への児玉先生の切なる思いで収集された膨大な数のアイヌ資料があるからこそ現在、ここに残されたアイヌ資料によって調査、研究が推進されアイヌ文化のいろいろな要素が少しずつ解き明かされているわけです。現在、このような児玉コレクションを含んだ函館にあるアイヌ資料の他にも、道内、国内、そして海外を含め類似する資料や関連する資料が少しずつ地球規模で発見されており、国際的なアイヌ研究プロジェクト等を組織し、このような点と点を線で結んでそれを面として捉えながらアイヌ民族の物質文化の調査、研究を行っていかうという気運が高まっているのも事実です。

最後に児玉コレクションの視点についてお話をしますと、アイヌの生活用具のバリエーションを観るということです。特に北海道アイヌの生活用具のバリエーションは多いので、時代とともに歩んできた文化の流れということか

らもそういう観点で観ることは重要なことです。それから、時代とともに変容する各地域におけるアイヌ文化の形も観てもらえればと思います。特に衣服の文様はその時代や地域を象徴するものがあり、素材についても時代とともに変わってきていることが分かります。また、技術的な伝承についても変遷を遂げている様を見ることができます。そして児玉コレクションもやはり函館コレクション群の中の一大コレクションということで、今後とも大いに活用していきたいものだと思っております。

函館コレクション、3本立てということで皆さんに「函館とアイヌ資料コレクション」をご紹介させていただきました。今日はありがとうございました。(拍手)